

表5 各区の斑点病発病株率推移

区名	調査場所	発生株率 (%) ^{x)}							
		調査日	10月9日	11月24日	12月21日	1月25日	3月1日	3月18日	3月24日
1	中央畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	0.0
	サイド畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	0.0
2 (1区対照)	中央畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	0.0
	サイド畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	0.0
3	中央畝		0.4	0.6	0.4	3.1	0.6	1.1	0.4
	サイド畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.3
4	中央畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	0.1
	サイド畝		0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	-	1.4
5 (4区対照)	中央畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	0.2
	サイド畝		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	0.4

x) 各区250～4,200株調査。

(2) 考察

- 1) キルパーの希釈倍数を24倍あるいは27倍とした区では、処理時に配管の切り替え作業もなく短時間で処理作業を終了することができた。また、処理直後にM I T Cガス濃度が急激に上昇したことから、処理方法として有効であると考えられた。希釈倍数71倍とした区では、処理時間帯が早朝(午前7～8時)で天候も曇天であったが、その後の天候の回復に伴いM I T Cガス濃度も上昇した。このことから、M I T Cガス濃度の上昇が遅くなった要因は、ハウス内気温が影響したと推測された。このため、キルパー処理時には、当日の天候や時間帯に注意し、ハウス内気温が上昇しやすい条件で処理することで、速やかなM I T Cガス濃度の上昇につながると考えられた。
 - 2) 対照区を設置した1区と4区では、対照区2区、5区とともに3月の調査時点まで斑点病の発生がなかった。このため、キルパーの斑点病防除効果は判定できなかった。定植後、生育初期からハウス内で部分的に斑点病が発生した3区では、前作で斑点病の発生が見られなかったことから、何らかの要因により病原菌がほ場に持ち込まれたと推測された。3区では、定植後から斑点病対象薬剤の定期的な散布により、斑点病発生株率を低く抑制し、切り花品質への影響も小さかった。このため、病害株の早期発見とともに、定期的な薬剤防除の重要性が再確認できた。
 - 3) キルパー処理に要する資材経費として、キルパーの他にかん水チューブが必要となるが、前作の栽培用に利用したものを利用することで経費削減を図ることができると思われる。その他、キルパー処理では、前作の古株を枯死させ、ほ場内へすき込むことで、片付け作業の省力化も期待できるが、処理終了後の耕耘で株元部が粉碎できず残さとして残ったため、今後の課題として残った。
- 以上より、今回の実証では、斑点病防除におけるキルパー処理の防除効果や防除省力化、低コスト化は判断できなかったが、効果的、効率的に斑点病防除を行うためのデータを得ることができた。今後、これらデータを活かし、斑点病防除につなげていく必要がある。

4 実証は設置の状況

【3区のキルパー処理状況】



タンクへキルパーを投入

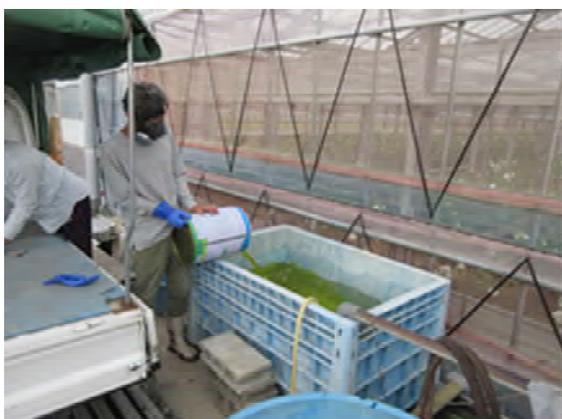


7連棟の内4棟に各棟1本のかん水チューブを配置



3区処理中の状況（撮影：6/29）

【4区のキルパー処理状況】



桶へキルパーを入れる（撮影：6/16）



処理ハウス（撮影：6/16）



ハウス内高温での塩ビ管変形防止のため外へ



処理後（撮影日：6/24）

【定植後の状況】



3区定植後生育初期の状況（撮影：10/29）



3区で確認された斑点病の病斑（撮影 10/29）



4区1番花採花終了後の2番花栽培
（撮影：3/24）



3区で確認された斑点病の病斑
（撮影：3/24）